Osaka University Knowledge Archive

Title	道の途中で : 島めぐり
Author(s)	大貫, 惇睦
Citation	大阪大学低温センターだより. 2016, 166, p. 13-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62111
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

談話室

道の途中で　―島めぐり―

琉球大学理学部　　大貫惇睦*

日本は地球上では太平洋に面する小さなそして長々と連なる列島です。その南端に奄美・沖縄が位置していて、中国・韓国・ロシア側から見ると、太平洋への入口を閉ざしているように地勢的には思えます。小さな日本の、そして更に小さなこの沖縄には、本島以外に人が住んでいる島がおよそ 50 あります。大きな島では宮古、石垣、西表、久米島、天気予報で登上する南大東島などがあります。高等学校がある島は本島以外では宮古、石垣、久米島です。私にとって島めぐりは沖縄での楽しみの一つです。これまで訪れた島の中から波照間、渡名喜、西表の 3 つを選んでその思い出をつづってみました。

もう 15 年以上前の大阪大学に在職していた頃に、JAL の機内紙に作家の鷺沢 萠 (さぎさわ めぐむ) さんが波照間を友人と旅した様子が 1 ページのエッセイとして掲載されていました。これまで味わった美味しいすしやビーフステーキより、波照間の波止場の食堂で食べた沖縄そばが一番美味しかったという内容でした。鷺沢さんが自転車で島を一周し、おなかペコペコで沖縄そばに食らいついた情景がエッセイに活写されていました。そのそばが確か 450 円で、往復の航空代が 45,000 円という ”おち” でエッセイは結ばれていたと思います。

そのエッセイを読んで是非行ってみたいと思い、大阪から石垣へ、そして 8 人ぐらい乗りの小さな飛行機で石垣から波照間へと、家内と出かけて行きました。飛行機のバランスをとるため、乗客の体重まで測定しました。鷺沢さんにならって自転車での島一周もしました。途中、いろんな風景に出会いました。例えば、山羊が庭につながれていて、山羊につながられたひもの円周内の雑草がすっかり食べつくされていました。日本の最南端を味わうべく崖の上でしばしぼーっとして大阪から持参したせんべいを食べました。島で唯一の小・中学校の前の雑貨屋のベンチで昔なつかしいアイスキャンディも食べました。そんな一周でした。そのせいか、波止場のそばはそれほど感動するものではありませんでした。その夜、民宿に同宿していた大学生に誘われて星を観に出かけました。宿から 100 m ぐらい歩くと、灯りは全く無い暗闇です。天を仰ぐと星は天に満ち、天の川が床にこぼれたミルクのように川になっていました。これが満天の星かと感動した次第です。

鷺沢さんはその後若くして自らの命を断ちました。沖縄の島めぐりは鷺沢さんの文章に出会ったのが始まりです。その才能が惜しまれてなりません。

日曜日のお昼は食事をしながら NHK ののど自慢、そして三枝の新婚さんいらっしゃいを見ることにしています。その中で平成になってはじめてのカップルが誕生し、三枝がその結婚式に出席した様子をテレビで見ました。島をあげての盛大な結婚式でした。島の名は渡名喜島です。テレビを

＊大阪大学名誉教授

見たのは大阪に居たときでしたが、いつか行ってみたいと思いつつ、2 年前にようやく念願が叶って研究の友と一緒に 3 人で出かけました。泊港 (トマリン) から久米島行きの船でおよそ 2 時間ぐらいのところにあります。 1 日 1 便です。

驚いたことに赤瓦の家々が整然と一定の面積で区画整理されていて、家の周囲にはビッシリとフク木が植えられているのです。フク木で有名な本島の備瀬の集落より美しいと思いました。小さな母屋、玄関から左手に洗面室、風呂場、トイレの 3 室が別棟で連なり、裏側には山羊や豚の小屋跡がありました。家敷全体が道路より低い位置にあるのです。集落は波照間と同じ一ヶ所に集まっていて、小高い島と低い島が合わさった砂地のような平地に集落があります。台風を避けるための家敷形態なのだと思いました。台風で水びたしになってもおそらく水は一日で地中に染み込んでしまうのでしょう。こういう民家の空家が旅行者の宿になっているのです。夜中にトイレに出かけるときは、ゾウリをはいて外に出ることになります。やはり星は天に満ちていました。

翌朝港に出かけると、ゾクゾクと小さな船が港にもどってきていて、2〜3 種類のサメがズラーと並べられていました。おばさんの話しでは、内臓から肝油が、皮肌はおろしなどに、肉は私達が食べているカマボコの材料になるとのことでした。カマボコは日常食べているので、サメの肉を食べていたのかと、おそるおそる鋭いトゲがびっしりとあるサメ肌に触れました。

西表は次号に。

清々と立つフク木